



TITLE:

北京の學界それから

AUTHOR(S):

今堀, 誠二

CITATION:

今堀, 誠二. 北京の學界それから. 東洋史研究 1944, 8(5-6): 330-333

ISSUE DATE:

1944-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145808>

RIGHT:

北京の學界それから

今 堀 誠 二

大東亞戰爭とつゞいて中國の參戰により、杜に眠れる北京の學界もさすがに奮起した。大學は動搖の中にも進展を求めて止まず、學會は叫喚に等しき熱狂を示す。資料も漸く整備して學人に隨喜の涙をしばらせ、新發足の研究所も旗鼓堂々進軍を開始する。總てが向上線を歩む若武者であり、時代を流す原動力である。

事變來の狂浪怒濤漸くをさまり、建設の並木路が永遠につゞいて行く。

だがしばし待て。世界史の進展に於ける北京の位置から言つて、現在では果して満足すべき状態にあるだらうか。第一北京に文化があると言へるだらうか。學生は影戲に狂ひ教授は麵價を語り學者は官吏を夢みて居る。眞に偉大な學問は眞に時代を惱む者より出づと言はれる。ランケよドロイゼンよ跳り出でよ。

一、漂遙する大學

北京の大學は、最近中國學院の昇格によつて四つとなつた。尤も中國大學には

史學系は無いから、當面の問題としては既存の三校について述べればよい謂である。

北京大學は新學年(九月)から、王靜如を迎へた。彼の西夏乃至中央亞細亞研究に就ては既に定評ある所、近く西藏語文典を公刊すると言ふ。この他國文系に容康を入れたし、年々飛躍的改善の迹が見える。馮承鈞・姚鼐等も中々活躍して居る。唯由來、北大は政治性の特に濃厚な學園で、謝國禎の如きも殆ど賣買人に近く、近刊の北京大學論文集も質量共に甚だ貧弱で、史學關係では一篇の論文もない。純粹學術の府としては一層の改革を必要とするかに考へられる。

師範大學では昨年度より研究院を新設して、董康・江紹原の老儒を迎へた。研究院は日本の新大學院に類し、給費學生を置いて専門人材を養成する所で、董康指導の下に南北朝經籍志の編纂がかなり進行し、その一部は出版を了して居る。

又「北京人」で有名な裴文中や昨年日本にも行つた日華交渉史の梁盛志などが花形的存在である。莫東寅も中和等に本格的論文を發表し始めた。然し歴史學の何たるかを解せざる李泰芬(文學院長兼史學系主任)の許にある本校の史學は有爲なる人々に失望をのみ與へる。師大學刊も第二期まで出たが、研究の名に價するものは多くない。

輔仁大學でも陳垣校長は健在で論文に專著に超人的活躍を續け、殊に現代の深刻な悩みを味つてその所論は一層の悲愴味を加へた。明季滇黔佛教考、南宋初河北新道教考などその尤たる秀作である。氏の高足たる余遜・葉德祿・趙光賢・柴德賡等若き講師が各々漢唐明宋の時代に就て陳垣ばりの重厚味を見せて居るのは壯觀で、一つの學風を作つて居る。孫楷第も病癒えて「近代戲曲原出宋傀儡影戲考」の如き傑作をものした。輔仁學誌及華裔學誌が續刊さるゝ他、昨年度新に民俗學誌を創刊し、葉德禮(Deer)を中心として充實した内容を誇つて居るのは、最近に於ける昆明方面での斯學の發達と相競ふものであらう。昨年十二月に催さ

れた金石拓本展覽會にも少からぬ稀見の珍品を見出し得た。然し、輔仁も又悲劇の運命から免れられない。今春文學院長沈兼士はいづこにか姿を消したし、有力な何人かの教授は捕縛された。尤も張星娘・孫楷第は偶々その日（正月一日）沈宅を訪れた爲に誤つてこの難をうけたのであつたが、かゝる傾向は同校の經濟的困難と共に暗い影を引くものと言はざるを得ない。沈氏は元より張星娘・梁啓雄・朱師轍等の久しい沈黙は如何した事だらうか。陳垣等の自重を希望して止まない。因に近く小林知生氏が此所に投ぜられ極めて好印象を學生に與へて居る由である。

今日北京の大學はかくも希望を有し乍らも結局漂搖の旅を續けるのは何故であらうか。これには種々の問題があるとしても、結局は史學理念の確立を缺く事が最大の缺點ではあるまいか。大學が文化運動の先頭を行つた時代は既に過ぎ、社會が大學を引きする現狀である。これも民國十八年以來の社會經濟的變化に由來するものであらうか……。

二、亂流の學會

れ、又は活動を開始した。先づ中央亞細亞協會が中央亞細亞を發刊した。この協會は新民會の後援に待つ由であり、雜誌にも一通り大家の顔をそろへたけれども特に如何といふ事もない。留日同學會が季刊を出版し始め、主に日華乃至中西の文化交流を扱つた問題を提高しつゝあり、中德學會も獨支の文化交流に盡す所少しとしない。年末に出來た學術文化審議會は華北學人の顔を集めて學術の振興を計る由であり、今年に入つて中國新文化建設協會生活文化協會などが雨後の筍の如くに續出して居る。だが、かゝる目的を他に藏する學會が如何に動いた所で何にならう。哀れを留めたのは東亞文化協議會で、昨夏は標準孔子像を印刷して各校に分配する事を決議したと言ふ。同じ協議會でも朱頤年が東亞固有法理研究會の設立を提議した法學部の方に、未だしも脈が存する。この他中華法令編印館より亞洲文化論叢が出て、中國文化の科學的研究をなす由であり、同聲月刊特に中和月刊には新時代の息吹を大きく呼吸した論著が少からず登載されて居る事は周

日本側の動きでは、北京文化協會が來、その學術部では今西氏等も參加して周口店の遺跡の訪問や中國民間藝術の紹介等を行つて居るが、通俗的なものである。それより昨秋以來、橋川時雄・多田貞一氏等が主宰して居る東方民俗研究會が資料の採集に研究の發表に大活躍を續け「幡桃宮研究」「北京地方考」等を始め約二十冊の東方民俗叢書が發刊されつゝある。柳田・折口兩氏の學を承けつゝ本研究會の健全なる發達を期待する。發會式もこの十月に行はるゝ由である。

三、浮沈する史料

今次の戰爭によつて多くの史蹟が滅び文獻が消滅したが、建設戰の進行と共にその調査並に保護が始まり、新資料の發見も行はれて來た。北京大使館事務所文化課に於て、華北古物綜録が編纂されたのも、この目的の下に行はれたのであるが、史蹟の範圍が所謂名所舊跡式の範疇に留まつて、吾人の所謂史料史跡に及ばないのは遺憾で一昨年に出た華北宗教年鑑にも及ばない。この點より言へば昨年末成立した京各省會館調整會では、内務

として、各會館の建築物と石刻との保護に乘出した事はまことに適切な事業と言ふべきであらう。同會は漳州會館にある蔡文恭の澄懷八友圖や、江蘇會館の古代エジプト石刻を保護し又紹介を行つて居る。又在燕佛教徒によつて佛教博覽會が佛像の集輯を中心として計畫され、柯政和等によつて古樂器を主として音樂博物館の建設が進行中である事は注目してよからう。前清の直隸官刻字局のものが壁中より見出されたのは北清事變の時に塗込められた品と考へられる。眞偽は確かでないが蒼岩山福慶寺に於て北齊時代の千餘の彫像を有する千佛洞が發見されたと傳へられ一日の話題をにぎはした事もある。だが現地には有識の徒に乏しく内地から來られた諸學者によつて多くの成果をあげしめて居る。最近の事件のみについて言へば佐藤長氏が蒙疆でチベット文獻の驚くべき發見を遂げたし、仁井田博士が商工ギルドに關する珍貴な資料を地を拂つて持ち歸られた。なほ長谷部博士が探索された北京人の骨は一時アメリカ行が傳へられたが、其後の調査では協和醫院より米兵營に移されたが、其を

國外に持出す暇は無かつた由で、天津秦皇島上海などで探查が行はれたが未だに見出されて居ない。思ふに今になほかゝる既存資料にまといつてより、新に掘り出すだけの元氣があつて然るべきであらう。この見地から言へば今春以來言はれて居る居庸關の調査、近く行はれる京漢線沿線の精究——その爲に村田・梅原兩博士等を招聘するのであるが——の如きも今更の感が無くはない。

北京圖書館への善本の復歸は、王鍾麟の南運書籍回運誌略に詳しい報告があるが、熱河作戦當時南遷した書籍の中、南京に移された書物と與圖は現に文物保管委員會の手によつて保存されて居たわけである。今回與圖三百八幅十四軸二冊と敦煌寫經十四卷子並に修書紙四種が持ち歸られた。上海に送られた書籍中、貴重品は米國に運ばれ、今回復歸したのは善本甲庫に屬するもの三七六部、乙庫に含まれたもの一九六八部で、西文は三三五部ありこれのみは全部復歸した譯である。他に金石碑帳八箱があり、主に梁啓超寄存のものである。然しまだ正確な目録さへ出来て居らず、整理の出来るのは何年先の

事であらうか。大半は虫がついて傷ましい姿である。だが善本と言へば宋元版と考へられた觀念は既に訂正されて居る現今、北京圖書館の盛衰に一喜一憂する必要はない。これよりも舊清華大學圖書館の書籍が北京大學及近代科學圖書館興亞學院等に分けて公開され、又アメリカンスクールの圖書館が開放され、大木文庫の東遷した事などに期待すべきであらうか。

出版方面では新民印書館の大學叢書の編纂も人材に乏しく、故宮博物院も殆ど積極的な事業をして居ないからかなりさびしい。その中にあつて、玄覽堂叢書の印行は明史研究者にとつて一大福音とすべきである。清史では愚齋存稿王文勒公奏稿等が出た。王善卿の丈祿堂訪書記は販書偶記と好一對をなすべきものである。北京で唯一の木版印刷所を有する董康が「雜劇三編」「書舶庸譚」などを校刊したが、夫より「慶元條法事類」が九割方刻字を了して居る事を報告して置かう。橋川時雄氏も居家必要書類全集の出版を計畫して居られるが、その成就の一日も早き事を祈つて止まぬ。量的には乏しくとも

質的に精選されて行く昨今の状況も北京文化にとつて決して悪い傾向ではない。

四、演進の研究所

色々な意味で大きな足跡を残した哈佛燕京社のなき後、あたかもこれに代る様な位置を占めつつあるものに中法漢學研究所がある。論語通檢を始め種々の引得類の出版を開始し、展覽講演會等もやつて居る。展覽會では「民間新年神像圖畫展覽」に於て門神財神竈神百神等を系統づけ、十八世紀十九世紀法國漢學圖書展覽」に於ては北堂藏書を中心として多少は珍らしい本も出品された。講演會では瞿益鏞の「漢畫象中之鄉亭組織」王靜如の「二十世紀之法國漢學及其與中國學術之影響」はいづれも右展覽會に因んでの事であつたが、よくまとまつた話とうけとれた。又これと兄弟關係にある孔德研究所からは、その叢刊として中國古代社會新研初稿が出たが、これはクーランジュの古代ギリシャローマ研究と比較しつつ圖騰制・祀火・母系制・昭穆の交迭・堯舜禪讓を論じたもので、特に最初の二章は出色の文字であつた。

的とする機關で瞿益鏞が館長である。現代知識叢書なる名稱の下に多くの參考書を出版したが、中で史學關係のものは秦漢史第一冊（瞿益鏞・張樹家合編）位である。それよりも月刊の館刊には中々よい論文も發表され、瞿氏の學界に於ける聲譽を示すに足るものであらう。殊にこの七月以來「中國近三十年來之出版界」と題して各學科別に連載され始めたのはすこぶる便利なるものである。この他中國側の研究機關には王楫唐を院長とする國學書院があり、孫海波等が書を講じ、古學叢刊を發行して古典的學者の牙城となつて居るが、敢て商牙にかける必要もない。燕京大學跡によつて新發足をなした華北綜合調查研究所では、色々な人々がそれのの意味で期待する所が大きかつただけに、種々注文もあるやうである。まだ開所式を舉げて間もない本所にこれと言ふ事業の始まつて居らぬ事は止むを得ないが、現地の研究所としての特色を生かす工夫にはかなり苦心されて居る様である。この上は唯研究所としての特性と指導理念の確立を期待するばかりであ

込んで居らるゝ由で傳芸子も習俗研究を擔當して居るとかである。又漢字紙「實報」に鳥居龍藏博士の記事が出た時、博士よりその訂正要求があつて博士が現にこゝの囑託なるを知つた。

今は絲研の傘下に入つたが滿鐵北支經濟調查局慣行班では、順義縣の調査の報告書完成に心血を注いで居る。その劃期的名著なるべきを期待して、公刊の日を待望するや切なるものがある。大使館資料室では馬政史の編纂に着手して居る。

時代の騷擾・調査の困難・生活の困窮を外に、否これを乗越して學術報國の鼓動が時々々と高鳴つて行く。さるにてもその前途は必ずしも坦々たる大道のみではあるまい。祈らくは北京の學界に、大東亞の力を凝結してこゝに文化を吹上らせていたゞきたい。純粹學術の興起も大東亞の建設もかくてのみ完遂し得るであらう。今は北京と昆明の一騎打の時代である事を銘記せねばならぬ。

「子曰學如不及、猶恐失之」（論語）

（一九四三・仲秋節・北京を去る日）

①輔仁學誌第十一卷第一第二合期